

☐ かかりつけ医のようでありながら、最新医療を提供できる病院を目指して

泌尿器科
部長
黒川 覚史



春日井周辺において、泌尿器科のある医療機関数は十分とは言えません。そのため、泌尿器科的な健康相談のできる「かかりつけ医^{*}」も十分とは言えません。当科では、患者さんが「かかりつけ医」のように身近に感じてもらえることを理想としています。それでいて、最先端の専門的医療を受けてもらえるように努力しています。

今回は、「腎がん」と「前立腺がん」など、当科の診療内容の一端を紹介します。

※「かかりつけ医」の定義

(2013年、日本医師会・四病協の合同提言)
なんでも相談できる上、最新の医療情報を熟知して、必要なときには専門医、専門医療機関を紹介でき、身近で頼りになる地域医療、保健、福祉を担う総合的な能力を有する医師

☐ 腎がんとは

腎がんは、腎臓にできるがんのうち、腎実質の細胞ががん化したものを指します。同じ腎臓にできたがんでも、尿の通り道である腎盂の細胞ががん化したものは腎盂がんと呼ばれ、腎がんとは区別されます。腎がんと腎盂がんでは、がんの性質や治療法が異なります。

腎がんには、特徴的な症状はありません。そのため、小さいうちに発見される腎がんは、検診などで偶然に発見されるものがほとんどです。肺や脳、骨・肝臓などに転移したがんが先に見つかり、結果として腎がんが見つかることも少なくありません。

腎がんにかかる割合は、年間約1万6千人に1人とされています。やや男性に多く、50歳代から70歳代まで高齢になるほど増加します。

☐ 腎がんの治療について

腎がんに対する標準治療は「手術」です。がんが広がったり、転移がみられたりする場合は、「薬物療法」などを行うこともあります。治療方針ですが、患者さん一人ひとりの状態をみながら、腎癌診療ガイドラインにのっとり ▲腎癌診療ガイドラインを進めています。



「手術」は、腎の全摘手術が一般的です。しかし、近年、がんがまだ小さいうちに見つかることが多くなってきたため、腎の部分切除術を行うことも増えております。具体的な術式としては、おなかを切開して行う「開腹手術」や、おなかに開けた小さな穴から腹腔鏡を入れて行う「腹腔鏡下手術」、手術用ロボットを遠隔操作して行う「ロボット支援手術」があります。当科では、全ての手術を行っておりますが、最新式の手術支援ロボット『ダヴィンチ』を用いた腎部分切除術に関して特に実績を重ねており、従来手術に比べて患者さんへの負担が減ったことを実感しています。

「薬物療法」に関しては、分子標的治療、免疫療法があります。日本では2008年から分子標的治療が標準治療となっています。しかし、今年の8月末から、2剤併用の免疫療法が新しく使用可能となりました。患者さんの状態に合わせて、薬物を慎重に選択しています。



▲手術支援ロボット『ダヴィンチ』



▲免疫療法の薬物